

「ロビンソン・クルーソー漂流記」 のおもしろさ

三 浦 謙

夏目漱石はその十八世紀文学評論の終章でデフォーを取上げ、その作品の組立てや文章の性格について、詳細に論じている。その中で、漱石はデフォーの作品はどれも冗長で、きわめて興味に乏しい。「ロビンソン・クルーソー」のような漂流譚ですら、車夫が車を引くような具合に書いていると述べている。車夫が車を引くようにとは、単調でまるで変化がないということだろう。「ロビンソン・クルーソー」は漱石のいうように、はたして終始単調で、興味の全くないものであろうか。

この点を検討するまえに、漱石のいう興味とはいかなるものかを鮮明にしておかなければならない。漱石はまず主観的な興味はその対象によって、客観的に分類することができるという、文学作品の興味を三つに区分している。それは、

- (1) 小説中の性格 (character) より起る興味
- (2) 小説中の事件 (incident) より起る興味
- (3) 小説中の景物 (scene) より起る興味

である。いうまでもなく、この三つの興味は、漱石の指摘のごとく、小説中にあるには、通常は、個々に完全に切離されることはなく、ある程度、相互に関連し合っているのが一般である。とりわけ、性格と事件との絡み合いは深いという差支えない。

この点、「ロビンソン・クルーソー漂流記」にあってはどうか。筆者は漱石の見解には賛同しがたいところがある。クルーソーが難船して孤島に

たどり着き、孤独に耐えて、二十六年生活する模様は異常な経験にも拘らず、興味に乏しい。それは、おもにクルーソーという人間の性格に基因すると思われる。クルーソーという男は、まさしくオーウェルが指摘したイギリス人の典型であって、日常の些末事を刻明に記録する質の実務家で、想像力に乏しく、冷静で、モノに動じない。このような男の終始変らぬ叙述は読者に倦怠感を起させる。ところが、この漂流記には、本流からはずれたところに、きわめて興味深い二つのエピソードがみられる。この漂流記を読みだして、半ばで投げだした読者のあずかり知らぬところである。それはクルーソーが従僕フライデーを連れて孤島を去り、マドリッドからピレネー山脈を越えて、フランス経由でイギリスに帰るときの話で、一つはフライデーの巧妙な熊殺しであり、もう一つはピレネー山脈の雪深い山中で、クルーソーの一行が不運にもめぐりあった獰猛な狼との凄惨な激闘である。最初のエピソードは漱石の分類にしたがえば、character と incident からの興味であり、二番目のエピソードは incident と scene からの興味である。

最初のエピソードがなぜおもしろいか。一つはフライデーという野蛮人の性格であり、もう一つは、そのユーモラスな熊殺しの方法にある。まずフライデーの性格だが、彼は人喰い人種にも拘らず、たいへんな父親想いで、残忍な性格ではない。父親が仲間に殺されそうになって危うく一命をとりとめた時には、父親の頭を抱きかかえて半時間も撫で廻したり、長い間、縛られていたために感覚を失ってしまっていた父親の手足を懸命にもみほぐす。フライデーはクルーソーには、この父親にたいするように従順であり、クルーソーのほうもフライデーを信頼しきっている。フライデーにたいするクルーソーの気持はフライデーの外貌を刻明に記述しているクルーソーのつぎのような筆にもよく現れている。

He was a comely handsome fellow, perfectly well made; with straight strong limbs, not too large; tall and well shaped, and as I reckon, about twenty six years of age. He had a very good countenance, not a fierce and surly aspect; but seemed to have

something very manly in his face, and yet he had all the sweetness and softness of an European in his countenance too, especially when he smiled. His hair was long and black, not curled like wool; his forehead very high and large, and a great vivacity and sparkling sharpness in his eyes. The colour of his skin was not quite black, but very tawny; and yet not of an ugly yellow nauseous tawny, as the Brasilians, and Virginians and other natives of America are; but of a bright kind of a dun olive colour that had in it something very agreeable, tho' not very easy to describe. His face was round and plump; his nose small, not flat like negroes, a very good mouth, thin lips, and his fine teeth well set, and white as ivory.

(pp. 208-209)

(彼はハンサムで魅力のある男で、体付もガッシリしていて申分なかった。手足は真直ぐ伸びていて遅しく、大き過ぎるということはない。背が高く、均齊がとれていて、私には廿六才ぐらいに思えた。顔形はたいへん整っていて、獐猛で、無愛想な面はなかった。顔立ちには、どこかたいへん男らしいところがあって、しかも、とくに笑うと、ヨーロッパ人にみられるような愛らしさと柔和さが感じられた。髪は長くて黒く、羊毛のように縮れていなかった。額は非常に高く、眼はたいへん生き生きして鋭かった。皮膚の色は黒というよりは黄褐色だったが、ブラジル人やヴァージニア人や、その他のアメリカの原住民にみられるような見苦しい、不快な黄色味を帯びた褐色ではなくて、明るい薄茶色がかったオリーブ色で、はなはだ説明しにくい、たいへん好ましい感じだった。彼の顔は丸くて、ふっくらして、鼻は小さいが、エグロのように平べったくなく、口は形がよくて、唇は薄く、歯はきれいにそろっていて、象牙のように白かった。)

クルーソーはこのように、フライデーの容貌を実に好感をもって描いている。このクルーソーの筆から、フライデーが、いかにも明るくて、愛嬌のある好男子であることがわかる。そして、この愛嬌者が笑いとは無縁の

ようなクルーソーを始めて心から笑わせるのが熊殺しの一件なのである。

その熊はクルーソーがそれまで見たことがないような大きな熊だったが、フライデーは一向に恐がる様子はなく、じぶんの特技がご披露できるのをよろこんでいるようだった。彼は尻餅をついて、はいていた長靴を脱ぎ捨て、ポケットに入れていた短靴にはきかえると、銃を持って風のように駆けてゆく。そして熊のそばまでくると、その背後に廻り、まず大きな石をとりあげて熊の頭に投げつける。熊という動物は王侯のように気位が高いので、たとへ小枝のようなものでも、ぶつけられると、侮辱されたと思い、日夜追いかけて、相手を殺すまでは収まらない。フライデーがぶつけたのが小枝ではなくて大きな石であるからたまらない。熊は向きを変えると、大股でフライデーを追いかける。フライデーは足が早く一目散に駆けて大きな檜の木に近づくと、持っていた銃を木の根元から五、六ヤードのところにおいて檜の木によじのぼる。この間、フライデーはあわてふためく気色はなく、身振り手振りで、クルーソーを笑わせる余裕がある。熊はすぐ後を追って檜の木のところまでくると、大きな重い体にもかかわらず、猫のように檜の木をのぼり始める。フライデーは比較的大きな枝の先きに陣取って、熊がその枝に足をかけると、熊踊りをみてくれといわんばかりに、枝を揺すりだす。熊はよろめいて動けなくなり、どうやったら戻れるかを考えている有様をみて、フライデーが危ういときには熊を撃とうとするクルーソーも、つい吹き出してしまふ。フライデーはこれ以上、熊が向ってこないのをみてとると、枝の先端まで進んで、じぶんの体重で枝を曲げ、地面にとびおる。すぐ置いてあった銃をとりあげるが、まだ熊を撃とうとしない。熊は敵が逃げたのをみてとると、後向きに一步一步、慎重に、後を振り返りながら戻ってゆく。幹までくると、やはり同じように後脚から一步一步と悠然と降りてくる。あと一步で、後脚が地面に着くという時に、フライデーは熊の傍に歩み寄り、銃口をすばやく熊の耳に押し当てて撃ち殺す。熊の巨体は一瞬にして、石のように動かなくなる。

‘Well, said I to him, ‘Friday, what will you do now? Why don’t you shoot him?, ‘No shoot, says Friday, ‘no yet, me shoot

now, me no kill; me stay, give you one more laugh; and indeed so he did, as you will see presently; for when the bear see his enemy gone, he comes back from the bough where he stood; but did it mighty leisurely, looking behind him every step, and coming backward till he got into the body of the tree; then with the same hinder end foremost, he came down the tree, grasping it with his claws, and moving one foot at a time, very leisurely; at this juncture, and just before he could set his hind feet upon the ground, Friday stept up close to him, clapt the muzzle of his piece into his ear, and shot him dead as a stone.

(p. 290)

剽軽者のフライデーは後を振り返り、クルーソーたちがおもしろがりながら、あまりにもあざやかなフライデーのお手並みに、あっけにとられているのを知ると、大声で笑いながら、さも得意げに、「これが私の国の熊の殺しかただ」という。かれらはふつう銃を持たないので、銃の代りに大きな矢をつかうのである。

筆者はこのフライデーの熊殺しから、オーウェルの「象を撃つ」というエッセーを想い起す。オーウェルは十九才でイートンを出ると、すぐにインド帝国警察の一員としてビルマに赴任し、植民地の警察官を五年間勤め上げる。その時の体験談の一つである。当時、ビルマでは反ヨーロッパ的感情が熾烈をきわめていて、オーウェルは周囲の原住民から憎まれていた。ある時、鎖を切って逃げた、さかり狂いの飼象が市を荒してこまるので、なんとかしてもらえないかという依頼をうける。オーウェルは旧型の0.44インチのウインチエスター銃を持ち、小馬に乗って、様子を見にでかける。現場に行ってみると、ビルマ人の警部補とインド人の巡査が数人、オーウェルを待っている。象はすでに竹小屋をこわし、果物の屋台を倒し、牝牛を一頭殺して、どこかに逃げ去っていた。象がどこへ逃げたか、原住民に訊ねまわっているうちに、新しい象の被害が見つかる。ドラヴィディア人¹⁾の苦力である。鼻でつかまえられて、背中に足をかけられ、地面に押

しつぶされていた。ちょうど雨期で、地面がやわらかかったので、男の死体は長さ二ヤード、深さ一フィートの地中にのめりこんでいる。顔は泥だらけだが、眼を大きく開き、歯をむき出して、苦悶の表情が歴然としていた。オーウェルはこの死体を見て、象狩り用の銃の手配をする。まもなく、銃と弾薬五発が届けられるが、その間に象の居場所もわかる。象はその場所から、わずか数百ヤードしか離れていない水田にいた。オーウェルが出かけると、その貧しい地区の全住民ともいっていいくらいの人間が、オーウェルの後からついてくる。オーウェルは象狩り用の銃を取寄せはしたが、象を撃つつもりは毛頭なかった。己むを得ない場合に備えたままで、あくまでも護身用である。オーウェルは象を見たとき、撃つべきではないと思う。労役用の象を殺すことは、高価な大型機械を一つ破壊するのも同然だからだ。ところが、そう思って後を振り返ると、二千人をくだらない群衆である。しかも、その数は刻一刻と増えてくる。その顔は一様に象が殺されるのを確信し期待している。その瞬間、オーウェルは東洋における白人支配の空しさをまざまざと見せつけられる思いがする。武器を持った白人が武器を持たぬ土民の前に立っているが、その実は、主役の白人が背後の二千に余る黄色い意志に操られているのだ。

このまま引退ったら、どれほどの嘲罵を土民から浴びせられることになるか。オーウェルは白人の面目にかけても、象を撃たざるをえなくなった。銃は十字線照準のついたドイツ製の逸品である。象を撃つには耳の孔と耳の孔をつなぐ線を狙う。したがって象が横向きのときには、耳の孔そのものを狙うのが原則だそうだが、オーウェルはそれを知らなかったので、耳の孔の近辺が脳のあるかと想定して、そこを狙い撃つ。

弾が命中して象が倒れるところは圧巻なので、ここに原文を紹介する。

When I pulled the trigger I did not hear the bang or feel the kick-one never does when a shot goes home - but I heard the devilish roar of glee that went up from the crowd. In that instant, in too short a time, one would have thought, even for the bullet to get there, a mysterious, terrible change had come

over the elephant. He neither stirred nor fell, but every line of his body had altered. He looked suddenly stricken, shrunken, immensely old, as though the frightful impact of the bullet had paralysed him without knocking him down. At last, after what seemed a long time—it might have been five seconds, I dare say he sagged flabbily to his knees. His mouth slobbered. An enormous senility seemed to have settled upon him. One could have imagined him thousands of years old. I fired again into the same spot. At the second shot he did not collapse but climbed with desperate slowness to his feet and stood weakly upright, with legs sagging and head drooping. I fired a third time. That was the shot that did for him. You could see the agony of it jolt his whole body and knock the last remnant of strength from his legs. But in falling he seemed for a moment to rise, for as his hind legs collapsed beneath him he seemed to tower upwards like a huge rock toppling, his trunk reaching skywards like a tree. He trumpeted, for the first and only time. And then down he came, his belly towards me, with a crash that seemed to shake the ground even where I lay.

(p. 271)

(引金を引いたとき、ハンという音も聞こえず、反動も感じなかった—命中したときはそういうものである—聞こえたのは群衆の中から湧き上がる悪魔のような歓喜の声だった。その瞬間、弾丸が命中するにも短かすぎると思われるその瞬間に、不思議な恐ろしい変化が象の身に起っていた。象は身じろぎもしなければ、倒れもしなかったが、全身の線が違ってしまっていた。弾の恐るべき衝撃が象を倒さずに麻痺させてしまったかのように、象は急にうちひしがれて、しなびてしまい、ひどく年老いたようにみえた。ついに、しばらくして——長い時間のようにも思えたが、五秒ぐらいたったかもしれない——象はへなへたと倒れて膝をついた。口からよだれをたらしていた。途方もない老齡にとりつかれたようだった。人がみたら、数千年の齡を重ねているように思えたことだろう。私は再び同じ個所

を狙って撃った。二発目をうけると、象はくずれるところか、必死になってゆっくり起きあがり、脚をふらふらさせ、頭をうなだれながら、力なくまっすぐに立った。私は三たび発砲した。それがとどめの一発だった。苦痛が全身をゆさぶり、脚から最後の余力がたたきだされるのがわかった。しかし、倒れながら、象は一瞬立ちあがるかのようにみえた。後脚が身体の下敷になるとき、象は巨岩がまくれ落ちるかのように聳えたち、鼻が木のよう空に向って伸びたからである。象ははじめて、そのときだけ、声をあげて鳴いた。それから、私が伏せていた地面さえも揺さぶるような地響きをたてて、腹を私の方に向けて象は倒れた。）

しかし、象はまだ死なない。象は大きく口を開いて規則正しい呼吸を続けている。オーウェルは淡桃色の喉の奥深くに、残りの二発を撃ちこむ。濃い血が赤いピロードのように噴き出すが、苦しい息づかいは小止みなく続いている。オーウェルは小さい銃をとってこさせて、心臓や喉の奥に、続けざまに弾を撃ちこむ。それでも苦しそうな喘ぎは、時計が時を刻む音のように、ゆるぎなく続いている。オーウェルは耐えきれなくなって、その場を立去る。オーウェルが人づてに聞いた話では、象が死んだのは、それから三十分後であったという。

フライデーの熊殺しと、この象を撃つはなしを比較するのは、きわめて興味深い。熊と象の違いはあるが、蛮族が文明人を前にして、動物を殺すばあいの大らかさと、逆に文明人が民度の低い原住民を前にして、動物を殺すばあいの、うしろめたさが歴然と描きだされているからである。この大らかさと、うしろめたさはフライデーが一発で熊を殺しているのに、オーウェルは数十発を費して、なお、息の根を止めかねているところにも、はっきり現れている。そして、フライデーの場合は複雑な心理の葛藤もなく、パントマイム的な挙動は、自然、陽的な笑いを誘うが、オーウェルの陰惨な象殺しは、そのまま、白人支配の虚妄に通じているのである。

「ロビンソン・クルーソー漂流記」にみられる二番目の興味深い挿話に移ろう。冬のピレネー山中での狼との死闘である。これは初めのユーモラ

スな熊殺しに続くエピソードである。クルーソーの一行は山麓の森林地帯で、三百頭は下らない狼の群れにかこまれる。クルーソーの目前には馬一頭と二人の人間の死体がある。銃がそばにころがっていて、発砲したと思われるほうの男の上半身は狼に喰いつくされていて、その残骸もない、飢えた狼はクルーソーの一行を囲んで、じりじりとその輪を縮めてくる。クルーソーは運よく伐り倒されてあった運搬待ちの木を胸壁にして三角形の陣形を作り、馬をその中に収める。やがて、狼が凄まじい勢で、馬を目がけて狂ったように襲いかかってくる。クルーソーは一人おきに一組になって撃たせ、四回の斉射で、十七、八頭の狼を殺し、三十五、六頭の狼に怪我させる。しかし狼の襲撃は執拗に繰返される。クルーソーは最後の一発は残しておいて、ここで一計を案じる。胸壁にしていた木の上に火薬を撒かせ、火薬の傍で、空になった短銃の引金をひいて燧石に発火させ火薬を爆発させる。胸壁に乗りかかっていた狼は火傷を負い、爆発の煽りで、陣形内にとびこんできた狼はすべて剣で切り殺される。この時、クルーソーは残った弾を全部撃たせて、喊声をあげる。関の声をきいて、狼は逃げだす。クルーソーの一行はその後を追い、怪我をして地面に倒れ、苦しそうに匍んでいる二十頭ばかりの狼をのこらず切り殺す。

I called my other man, and giving him a horn of powder, I bad him lay a train all along the piece of timber and let it be a large train; he did so, and had but just time to get away, when the wolves came up to it, and some were got up upon it; when I snapping an uncharged pistol close to the powder, set it on fire; those that were upon the timber were scorcht with it, and six or seven of them fell, or rather jumped in among us, with the force and fright of the fire; we dispatched these in an instant, and the rest were so frighted with the light, which the night, for it was now very dark, made more terrible, that they drew back a little.

Upon which I ordered our last pistol to be fired off in one volley, and after that we gave a shout; upon this, the wolves

turned tail, and we sally'd immediately upon near twenty lame ones, who we found struggling on the ground, and fell a cutting them with our swords, which answered our expectation: for the crying and howling they made was better understood by their fellows, so that they all fled and left us.

(pp. 294-295)

クルーソーの一行が殺した狼の数は全部で約六十頭であった。この三百頭に上る狼との闘いは、余程クルーソーにこたえたと思われる。クルーソーは二度とピレネー山脈を越える気はしないし、狼に出遭うくらいなら、毎週、嵐にあいながらも、三千マイルの航海をするほうがましであると述懐している。この狼との苦闘は凄惨だが、物足りないのはフライデーの扱である。熊殺しで、あれだけ活躍したフライデーの動きが、ここでは銃に弾を填めるのが早かったというだけで、一行で片づけられている。主従共にどんな応戦をしたか活写してほしかった。

以上挙げた二つのエピソードはそれぞれにおもしろい。しかし、どちらのほうがまさるかと問われれば、筆者は前者の熊殺しをとる。「ロビンソン・クルーソー漂流記」では、傍役のフライデーが一人精彩を放っているのである。それだけに、フライデーの動きが描かれていない後者のエピソードは、その分だけ興味が減殺されてくる。

では、この二つのエピソードは、それ自体は興味深いが、ストーリー全体の統一を強める役割を果たしているであろうか。これには否定的な答をせざるをえない。この二つのエピソードは長大なストーリーの枠からはずれた形で、その結末に添えられてあるだけで、ストーリー全体の統一を強めているとはいえない。このストーリーの核である、二十六年にわたる孤島でのクルーソーの生活の中に、従者を主とする、一種の太郎冠者狂言^⑨的なエピソードをフライデーを中心に点在させれば、クルーソーの孤島生活は興味が増したと思われる。孤島でのクルーソーとフライデーの交流を主に宗教的教化に終始させて、フライデーの個性を生かしきれなかったところに、この漂流譚の興味の限界がある。

注(1) Dravidian [drəˈvɪdiən]；インド南部に住むアリアン系の種族で、インドでは下層民。

(2) 従者を主人公にした狂言で、大名狂言にたいして、冠者物ともいわれる。最も典型的な狂言で、木六駄、芒々頭、成上りなど、数もこの類が最も多い。

参 考 文 献

夏目漱石全集第十八卷，明治文学刊行会，1948。

George Orwell : Collected Essays, Journalism and Letters 1, Penguin Books, 1968

Daniel Defoe : Robinson Crusoe, The Penguin English Library, 1971